

石川県・富山県の海底文化財に関する調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 達夫, 田崎, 稔也, 渡邊, 玲 , 松井, 広信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/27693

石川県・富山県の水中文化遺産関係資料

佐々木達夫・田崎稔也・渡邊玲・塩澤隆慈・松井広信

石川県の水中文化遺産に関する調査を2009年度から継続して行っている。石川県の海岸線は複雑で全国的にも長く、海岸踏査も積極的に行ってきました。能登半島は日本海の中央に位置し、海上交通の要衝であったと同時に難所でもあった。近世においては多くの海難記録も残されており、能登半島沿海には多くの沈没船が存在するといわれる。石川県の沿海では縄文時代から近世に至るまでの多くの遺物が海底から引き揚げられている。特に中世の珠洲焼が多く、早くから知られていた。珠洲焼資料館の九千房百合氏にお世話になった。感謝。また、富山県においても2009年度から地元の学者などの協力のもとで海岸踏査や研究会を通じて活動している。本稿では今年度までの成果を昨年度報告したものと含め紹介する。

石川県

宝達志水町

後述の「嵯峨井コレクション」の一つであるタイ壺を調査した際、担当者から宝達志水町沖より宋～明時代の中国染付が引き揚げられたとの情報を得た。個人所蔵のため、現在追加調査の計画段階である。

志賀町

志賀町福浦 ($N37^{\circ} 5' 36'' / E136^{\circ} 43' 32''$) に位置する福浦港は、日本海側有数の風待ちの港として栄



Fig.1 踏査地点分布図

え、古くは渤海使の船が往来する国際港として、江戸時代には北前船の寄港地として機能した。港は「水の瀬」と「大瀬」の2つの瀬からなり、港内各所に岩盤を穿って造られた「めぐり」と呼ばれる係留施設が点在する。

大瀬西側に位置する「日和山」には、慶長3年(1608)に日野資信によって日本最古の木造灯台が設置された。灯台に隣接する金毘羅神社前には弘化4年(1847)に船頭信平により寄進された方角石を見る事ができる。木造灯台から海岸伝いに南下した「田の尻」では、近世から明治にかけての陶磁器が採取された。遺物1は内面に二重格子文が描かれる波佐見染付皿。18世紀前～中葉。2は波佐見斜格子文染付小丸碗。18～19世紀。5～16は明治の型紙染付皿であり、9・10・12・15・16は蛇の目凹高台が施される。「田の尻」の後背崖沿いに「極楽坂」まで移動すると、海を一望できる場所に近世の墓地がある。墓碑銘から被葬者の出自を北部九州や大阪など日本各地に求めることができる。

輪島市

輪島市では曾々木海岸、門前町域の海岸をそれぞれ踏査した。旧門前町域では天候に恵まれなかったことも影響して、これまでのところ成果は上がっていない。輪島市町野町曾々木大川浜 ($N37^{\circ} 27' 14'' / E137^{\circ} 4' 14''$) に所在する砂浜。海岸の東寄りのところに通称「窓岩」と呼ばれる奇岩があり、そこから東側では小石が主体の浜となる。海岸の中央部は町野川の河口に面している。採集された遺物はごく僅かである。

平安中期の双耳瓶(Fig.12-2)。門前町猿山岬沖で引き揚げられた。(石川県輪島市教育委員会, 1985)

古墳前期の壺(Fig.12-3)。舳倉島沖の西北約20～30km、水深約200mの海底から引き揚げられた。まっすぐに外反する有段口縁の壺で、頸部から肩にかけて、ヘラ状工具による綾杉状文が施され、その中央と下端には沈線が一条ずつ施されている。また全体がきれいに磨かれているが、一部にハケ調整の跡が残り、内面は口縁から頸部にかけて指ナデ調整で、胴部は右回りに削り調整が施され下部になるほど薄くなっている。胎土は0.5mm前後の砂粒を含み、焼成は極めて良好で明淡黄白色を呈している(石川県輪島市教育委員会, 1985:18-19, 22-23)。

平安初期の須恵器甕(Fig.12-4)。輪島沖で引き揚げられ

た。(石川県立郷土資料館 1981)

平安末期の珠洲焼中壺 (Fig.12-5)。器高 38.8cm、口径 21.5cm、胴径 33.5cm、底径 15.0cm。胎土・焼成はともに良好で、色調は灰青色で照りがある。輪島沖で引揚げられたと伝わる。口縁先端を鋭角に折り返し肩の張りが強く、口頸基部から 4cm ばかり下った位置から底部より 6cm 以上まで傾斜の強い端正なタタキ目を施す。底部は砂底。肩部および胴下部には回転横なで痕あり (能都町史編集専門委員会 1982:151)。

タイ壺 (Fig.12-6)。宝達志水町 (旧押水町) 押水図書館所蔵の「嵯峨井コレクション」の一つである。器高 29.8cm、口径 15.4cm、底径 10.5cm。大沢町沖から 14 世紀後半～15 世紀前半代とみられる、タイ・スパンプリン窯の灰陶広口壺が引き揚げられている。広口で肩の張りが強い器形ながら、歪みは少なく、還元の須恵器質に焼き上がる。色調は灰白色を呈し、胴部の下位に白い酸化部分が斑文状に見られる。その整形は底部粘土盤の上に、粘土紐の輪積みで造り上げ、その後に回転台で調整と施文を進めたと判断される。壺の内外の調整は良好で、各部に鮮明な文様が残る。(垣内 1995:97-101)。

珠洲焼叩壺 (Fig.12-7)。器高 49.0cm、口径 22.2cm、胴径 41cm、底径 12.5cm。輪島市曾々木沖約 29km から引揚げられた 14 世紀の珠洲焼である (図説 輪島の歴史編纂専門委員会 2003:38-39)。

珠洲焼綾杉状叩壺 (Fig.12-8)。器高 47.5cm、口径 21.0cm、胴径 37.0cm、底径 13.0cm。舳倉島沖で引揚げられた、14 世紀の珠洲焼の綾杉状叩壺である。(図説 輪島の歴史編纂専門委員会 2003:38-39)。

珠洲市

珠洲市の北部海岸には急峻な崖に囲まれた小さな入江が点在している。18～19 世紀の肥前陶磁器がまとまって採取された木ノ浦海岸や、川浦海岸において河崎倫代氏によって近現代の陶磁器が表面採取されている事例を除けば、19 世紀以降の陶磁器が少量採取されたにとどまっている。現在の集落と近接している地点も多くいため、海揚がりではなく、集落で廃棄したもの、あるいは河川から流出した物を含んでいる可能性も考慮すべきであろう。江戸時代から明治にかけて船が沈没した記録の残る姫島以東では採取された陶磁器の数量が急増する。引砂・高波では大量の珠洲焼片とともに少量の近世陶磁器が散乱している。同地で

は定期的に表面採集を実施しているが、比較的大型の破片が同じ地点で発見されること、繰り返し表面採集を実施しているにもかかわらず訪れる度に新たな陶磁器片が散乱していることから、これらの遺物は海から漂着したものと考えられる。高波海岸と伏見川河口を挟んで南に位置する伏見海岸でも珠洲焼および近世から明治にかけての陶磁器が採取されるが、それの中には同じ種類の肥前陶磁器が複数個体まとまっているのが特徴的であり、海上で投棄された船の積み荷であった可能性もある。鉢ヶ崎海岸から飯田海岸にかけては遺物が今次調査によって採取された遺物は少ない。飯田海岸では平安時代の製塩土器なども採取されたが、おもに明治から大正のものである。以下にその概要を記載する。

木ノ浦海岸。珠洲市木ノ浦 (N37° 31' 45" / E137° 15' 54") の入江に立地する礫浜で、幕末～近代の陶磁器が採集された。珠洲市折戸町 (N37° 31' 39" / E137° 16' 50") に位置する砂浜。折戸川河口に面している。珠洲焼および近代の陶磁器が採集された。聞き取り調査を行なったところ、以前は沖合漁で珠洲焼が揚がったこと (具体的な場所は不明)、沖合いで千石船が沈んだことがあるという伝承を伺うことができた。折戸町海岸の東、珠洲市川浦町 (N37° 31' 34" / E137° 17' 57") に位置する砂浜。近世～近代の陶磁器が採集された。遺物は同海岸の西側で比較的多く東側では少ない。珠洲市高屋町小浦出 (N37° 31' 3" / E137° 14' 4") では近現代の陶磁器片を採集した。20 は蛇の目釉剥ぎを有す。珠洲市高屋町新保 (N37° 31' 10" / E137° 14' 40") に位置し、高屋漁港に隣接する砂浜。海岸線から数メートルの所に消波ブロックが設置されている。近現代を中心に珠洲焼や近世磁器を含む陶磁器片が採集された。採取された遺物は、付近に立地する集落から投棄されたものも含むと考えられる。120 は 18 世紀後半の筒型碗の底部。118 は有田染付皿で、1640 年代～50 年代の製品。高台は小さく畠付部分は無釉である。馬縄町鰐崎から笹波町までの海岸 (N37° 30' 52" / E137° 13' 18")。砂浜と岩礁が混在する。近世～現代の遺物が採集された。116 は近代の色絵蓋で外面中央に「山屋」の文字、体部外面に五弁花が上絵付けされている。珠洲市馬縄町に位置する、鰐崎から大崎にかけての浅い入江状になった砂浜海岸 (N37° 30' 29" / E137°

12' 55")。海岸には4本の小河川が流れ込む。漂着ゴミや海藻類も比較的少なく幕末から近代の陶磁器片が少量採取された。珠洲市三崎町寺家字遭崎は寺家漁港に隣接し、小石と砂からなる礫浜(N37° 30' 12" / E137° 21' 3")。沖合いに姫島が見える。江戸時代後期の染付、近現代の陶磁器や蛸壺が採集された。遺物34は18世紀後半の青磁染付筒型碗、33は明治の型紙刷染付、41は19世紀の肥前の染付皿で蛇の目凹高台を有する。39は墨呉須で染付された大正以降の製品。40は日本硬質陶器株式会社製のクロム染付。珠洲市三崎町森腰から引砂にかけての砂浜(N37° 28' 11" / E137° 21' 4")。須恵器・珠洲焼・近世・近代の遺物が採集される。北側の森腰から同地にかけて須恵器と珠洲焼の破片が採集されているが、特に珠洲焼が多い。同海岸には宇治役場裏遺跡、森腰浜遺跡が立地することから、海岸線の改修工事等により流出した砂に混じっていた遺物が海岸線に再び打上げられている可能性もあるが、他の地点と比べて一際多くの遺物が採集され、両遺跡は古墳時代の遺跡であることから、海底に遺物の集積が存在することも考慮される。42は18世紀後半の波佐見丸文丸碗、43は同時期の広東碗である。53~57は珠洲焼、46~48は近世・近代の陶磁器である。55は壺口縁で珠洲焼編年のⅢ~Ⅳ期の製品。54は鉢口縁部で時期はⅢ期。57は外面に波状文が描かれた鉢でⅠ期の製品。53はシュノーケリング調査時に採取された壺の底部、56は壺口縁で製作時期はいずれもⅢ~Ⅳ期である。46は18世紀後半の肥前の筒型碗。珠洲市三崎町高波(N37° 27' 44" / E137° 21' 23")。珠洲焼および近世~現代の陶磁器が採集された。海岸の背後の丘陵裾部の畠地は高波遺跡として知られており、海岸で採取された珠洲焼もこの遺跡から流出した可能性を考慮せねばなるまい。また、同地は正徳四年(1714)に越前からの船が難船した記録が残っている(『珠洲市史』第3巻pp.527-9)。115は18世紀末~19世紀の肥前で焼かれた製品で見込み部分に蛇の目釉剥ぎが施される。珠洲市三崎町伏見にある、紀の川河口南側に位置する礫浜(N37° 27' 28" / E137° 21' 32")である。中世~近代の陶磁器が数多く採集された。58は珠洲焼の中甕の口縁で海水中のカルシウムが再結晶化して付着している。59は珠洲焼擂鉢。口唇部に沈線文様が施され、時期はいずれもⅤ期。60は波佐見の染付

唐草皿と思われるが、磨耗が激しく製作年代は不明。61は波佐見青磁碗、62も同じく波佐見の染付碗で時期はともに17世紀中葉。67は口唇部に口鍛が施された18世紀の染付皿。63・64は波佐見の皿。18世紀前半。66は見込部分に蛇の目釉はぎが施されアルミナが塗られている。19世紀前半の波佐見染付丸文丸碗。65は肥前染付皿で体部には型打ち成形による連蓮状の浅い溝みが認められ、蛇の目凹高台を有する。18世紀。68・69は肥前徳染付利。18世紀。70は肥前染付皿。72は18世紀末~19世紀初頭の波佐見の陶胎染付丸碗。73は見込み部分が蛇の目釉はぎを施され、アルミナが塗布されている。19世紀前半の波佐見。74~76,79は19世紀の肥前染付皿ないし碗。80は18世紀末~19世紀の肥前の染付皿。77は19世紀前半の肥前の鉢。78,81は明治の染付。83は型紙、84は銅版刷、85は銅版転写で絵付けされている。珠洲市鉢ヶ崎(N37° 26' 20" / E137° 19' 43")に所在する東西幅約3kmの砂浜。珠洲焼資料館を基点に東西二手に分かれて蛸島漁港から小泊漁港の区間で表面採集を試みたが近現代の陶磁器が少量採取されたにとどまっている。珠洲市飯田町(N37° 26' 29" / E137° 16' 57")に所在、若山川の河口から蛸島漁港までの東西約3kmの海岸。現在の珠洲市の中心部に位置し、海岸に沿って住宅地が展開している。平安時代の製塩土器も採取されたが、採集品の大部分は近代以降の陶磁器である。珠洲市鵜飼にある見附島から般若川河口までの間に位置する海岸(N37° 24' 15" / E137° 14' 38")。海岸中央部に面した鵜飼川南側は鵜飼漁港が立地しており護岸されている。北側の海岸では漂着ゴミや海藻類は見られるものの遺物は発見できなかった。珠洲市宝立町(N37° 23' 7" / E137° 14' 13")見附島から恋路ヶ浜までの南北約3.3kmの海岸。大部分の箇所がすでに護岸された状態であり、海岸沿いに展開する集落より廃棄されたと思われる近現代の陶磁器がごく少量採取されるにとどまる。

珠洲焼叩壺(Fig.13-9)。器高36.1cm、口径23.5cm、胴径34.7cm、底径11.0cm。明治30年代に珠洲市上戸町沖から引揚げられた。胎土・焼成は良好で、色調は暗青灰色を呈する、13世紀の珠洲焼である(珠洲市史編さん専門委員会1976:1005)。

珠洲焼櫛目文壺(Fig.13-10)。器高25.5cm、口径11.8cm、胴径19.2cm、底径9.9cm。珠洲市上戸町

～飯田町沖で引揚げられた、平安末期の珠洲焼である（吉岡 2010）。

珠洲焼中壺 (Fig.13-11)。器高 35.4cm、口径 15.5cm、胴径 30.7cm、底径 11.5cm。珠洲市上戸町～飯田町沖で引揚げられた、鎌倉後期の珠洲焼である（吉岡 2010）。

珠洲焼中壺 (Fig.13-12)。器高 30.9cm、口径 11.8cm、胴径 26.8cm、底径 8.6cm。珠洲市狼煙町沖で引揚げられた、室町中期の珠洲焼である（吉岡 2010）。

珠洲焼大壺 (Fig.13-13)。器高 (16.8cm)、口径 18.4cm。下部欠損。珠洲市宝立町沖で引揚げられた、鎌倉後期の珠洲焼である（吉岡 2010）。

珠洲焼資料館

珠洲焼資料館には珠洲焼が 7 点、須恵器が 2 点展示されていた。

珠洲焼大甕 (Fig.13-14)。器高 50.3cm、口径 33.1cm、胴径 50.0cm、底径 15.1cm。珠洲市狼煙沖町沖から引揚げられた、13 世紀前半の珠洲焼である（吉岡 2010）。

珠洲焼小壺 (Fig.13-15)。器高 9.9cm、口径 7.8cm、胴径 12.6cm、底径 6.4cm。珠洲市三崎町長手先沖で引揚げられた、13 世紀前半の珠洲焼である（吉岡 2010）。

珠洲焼擂鉢 (Fig.13-16)。能登町宇出津沖から引揚げられた、14 世紀の珠洲焼である（吉岡 2010）。器全体を海生生物が覆う。

珠洲焼水瓶 (Fig.13-17)。器高 (16.6cm)、胴径 17.1cm、底径 10.4cm。珠洲市飯田町沖から引揚げられた、13 世紀の珠洲焼である（吉岡 2010）。

珠洲焼擂鉢 (Fig.13-18)。13 世紀後半の珠洲焼で、海揚がりであるが引揚げ地点は不詳である。

珠洲焼中壺 (Fig.13-19)。器高 40.9cm、口径 24.6cm、胴径 37.6cm、底径 15.2cm。珠洲市宝立町沖で引揚げられた、12 世紀後半の珠洲焼である（吉岡 2010）。

珠洲焼叩大甕 (Fig.13-20)。13 世紀後半の珠洲焼で、海揚がりであるが引揚げ地点は不詳である。

須恵器甕 (Fig.14-21)。珠洲市狼煙町沖で引揚げられた、10 世紀の須恵器である。

須恵器甕 (Fig.14-22)。珠洲市狼煙町禄剛崎沖で引揚げられた 10 ～ 11 世紀の須恵器である。

枠谷秀一さん保管品 (Fig.9 ～ 11, 15 ～ 18)

珠洲市在住の枠谷秀一氏は、長年にわたって飯田海岸で陶磁器片を採集し、それらは 15 世紀から 19 世紀の、中国龍泉、肥前・有田・波佐見・志田に加え砥部焼などを含んでいる。

34 は 15 世紀の竜泉窯青磁碗、35 は 17 世紀初頭の肥前陶器溝縁皿である。1 は 17 世紀中葉の波佐見青磁皿、2 は 17 世紀末の銅緑釉皿。内野山窯あるいは嬉野の製品か。3 は 18 世紀前半の染付丸碗である。産地は波佐見か。4 ～ 8 は 18 世紀前葉～中葉の肥前磁器である。4 ～ 6 は波佐見。4 ～ 5 は見込部分に蛇の目釉はぎが施される。6 ～ 7 は有田の製品である。9 は波佐見で 18 世紀後半の丸文丸碗、10 は産地不明染付筒型碗。製作時期は 18 世紀後半と思われる。11 ～ 12 は 18 世紀の波佐見丸碗。13 は 18 世紀後半の波佐見染付皿。14 は 18 世紀後半～19 世紀の波佐見系染付皿。底部は碁笥底状に削りだされ無釉であり、見込み部分に蛇の目釉はぎが施されるとともに中央に五弁花が描かれる。15 ～ 17 は 18 世紀後半～19 世紀前半の肥前系染付皿。18 は 18 世紀後半～19 世紀の波佐見系染付皿。20 ～ 22 は 18 ～ 19 世紀の有田染付。20 ～ 21 は丸碗で 20 の高台裏には崩れた二重角福が描かれる。23 は 18 ～ 19 世紀前半の波佐見染付小丸碗。24 は波佐見染付端反碗。19 世紀前半の製品。25 は産地不明の白磁 / 染付碗で見込部分に蛇の目釉はぎ。18 ～ 19 世紀か。26 は 19 世紀の波佐見青磁仏花瓶、(15) は肥前地域で焼かれた青磁香炉。27 は染付皿。蛇の目凹高台を持ち、見込部分にハリ跡が確認できる。底部の 19 世紀の製品。28 ～ 29 は 19 世紀の志田の製品。30 は 19 世紀の波佐見系染付皿、31 は同じく 19 世紀の肥前染付皿。32 は 19 世紀の染付皿だが、こちらは蛇の目凹高台ではない。33 は明治時代の波佐見で焼かれた染付碗である。

能登町

珠洲焼中壺 (Fig.14-23)。器高 39.0cm、口径 22.5cm、胴径 34.6cm、底径 14.1cm。能登町小木沖で引揚げられた。胎土は小石を含むが良好、焼成は良好、色調は灰褐色を呈する（能都町史編集専門委員会 1982）。

穴水町（穴水町歴史民俗資料館）

須恵器甕 (Fig.14-24)。器高 46cm、口径 20cm、胴径 46.5cm。曾良沖から引揚げられた、奈良時代の須恵器である（図説穴水の歴史編纂委員会 2004）。内面には叩き成形による青海波紋がめぐり、外面には叩き

目が明瞭に残る。尖底で自立できず、口縁断面はほぼ方形で、底部に向かうにつれ器肉は厚みを増す。鉄錆や海生生物の付着痕が残り、その状態から、3分の2ほどが泥中に埋まっていたことが伺える。また、口縁部破断面は摩耗が見られ、長い間海底に没しており、引き揚げ時に割れたのではないことが伺える。水勢摩耗は弱く、前述のことと併せて考えると水深5mの浅瀬で引き揚げられた割には天候等の影響をあまり受けていなかったと考えられる。

穴水では、他に中居沖から珠洲焼中壺が引き揚げられており、ともに遺跡地図に記載されている（遺跡番号曾良：37123、中居：37078）。

七尾市

能登島マリンパーク海族公園（七尾市能登島佐波町）では、ボランティア企画「クリーンビーチ・ななお」に参加する形で踏査を行った。参加者の方々に協力を呼びかける形で七尾湾に面する500mほどの砂浜を1時間ほどかけて歩いた。結果、採集された遺物はなかった。沖に寺島が見え、海水浴場ということもあり、波がとても静かであった。打ち上げられていたゴミは海草、釣具と見られるものが主だった。

能登島西部の踏査は、蝦夷穴歴史センターのある佐波付近から、車で踏査できる場所を探し、佐波南部の海岸沿いから能登島北西部の八ヶ崎海水浴場までを調査した。北東部の田尻沖合では、新しいものではあるが、木造沈船が確認されている。また北部の向田付近の入り江には戦時中に潜水艦が隠されていたという伝承が残っている。しかし、調査では、能登島西部に踏査可能地域を発見することはできなかった。能登島西部は海岸のほとんどが護岸されており、海も深い。また、海岸へと降りていく道が存在するところも少なく、踏査は難しいということがわかった。北部にはそわじ鼻海水浴場や八ヶ崎海水浴場など、海岸が見られたが、波も静かで、遺物は確認されなかった。

縄文土器（Fig.14-25）。七尾市寺島沖で引揚げられた。土器は口縁部と底部を欠失し、胴部だけが完形で残ったもので、色調は濃茶褐色をなし胎土に0.5～1mmの小砂礫粒が多量に含まれ、焼成は良好で堅緻である（能登島町史専門委員会 1982:403）。

弥生土器（Fig.14-26）。現高40.8cm、胴径30.7cm、底径9cm。七尾市能登島沖で引揚げられた。頸部以上を欠いているが、完形品に近い。胴から底部へかけ

ての形は甕譲形というべきものだが、胴上半より頸部へのつぼがり方は、むしろ壺形とすべき形状をなす。器表全面にハケ目調整痕を残すが、頸部近くでは横ハケ、胴部では斜方向とし、底部近くで縦ハケとしている。内面の調整法は磨耗のためか明瞭でない。色調は明褐色を基調とするが、胴部器表にはかなり黒斑を見ることがある（能登島町史専門委員会 1982:432-433）。

壺形土師器（Fig.14-27）。器高10.5cm、口径10.3cm、頸部径5.6cm、胴径10.3cm。七尾市寺島沖で引揚げられた土師器で、外反する口縁径と胴径が等しいタイプである。淡い黄褐色を呈する（能登島町史専門委員会 1982:485-486）。

壺形土器（土師）（Fig.14-28）。現高10.5cm、胴径12.4cm、頸部径6.8cm。七尾市寺島沖で引揚げられた、直口する頸部をもつ壺形土器で、胎土に多量の砂粒を含み、乳白色を呈する。外面にススの付着がみられ、底部には全面に貝殻が付着する。六世紀初めごろのものとみられる（能登島町史専門委員会 1982: 486）。

台付の壺または甕（Fig.14-29）。台底径10.3cm。七尾市寺島沖で引揚げられた土師器で、荒い砂粒を多量に含む。（能登島町史専門委員会 1982: 486）。

台付壺（Fig.14-30）。現高11cm、胴径12.6cm。七尾市寺島沖で引揚げられた土師器で、多量の砂粒を含んでおり、外面にはフジツボなどの貝殻が付着している（能登島町史専門委員会 1982: 486）。

須恵器塊（Fig.14-31）。器高4cm、口径13.7cm、底径6.1cm。七尾湾西湾の種ヶ島沖から引揚げられた須恵器で、口縁部の一部を欠くが完形品である。色調は青灰色をしているが、伏せられていた見込みの空洞となっていた部分と海中に露出していた部分は、塩分と酸化のため淡い茶褐色をしている。器形は底部が平坦であり、胴部が膨らみ、口縁部が指ナデ圧によって薄く外反している。製作手法は右廻り回転ロクロ上で、粘土塊から一気に引き上げる一本ビキによる可能性がある。ために、見込み底部に螺旋状痕を残しており、器壁の厚さは一定でない。特に底部と口縁部が薄くなっている。底部はヘラ切りか糸切りか明瞭でない。胎土は多量のこまかい石英粒と、まばらに雲母・長石・海綿骨片を含んでいる。製作年代は9世紀末から10世紀前半代と考えられている（唐川 1933）。

珠洲焼小壺（Fig.14-32）。器高21.3cm、口径13.9cm、

胴径 23.3cm、底径 12.2cm。七尾市和倉町沖で引揚げられた室町中期の珠洲焼である（吉岡 2010）。

富山県

氷見市

氷見市中田に所在する九殿浜（E137° 1' 47" /N36° 56' 29"）は礫海岸で、近世～近現代の漂着遺物を採集した。消波ブロックあり。遺物 1 は 18 世紀ころの染付皿。2・3 は近代以降の染付皿。1・3 は蛇の目凹型高台を有する。九殿浜の対岸には虹が島を望む。虹が島では海底から磨製石斧が引揚げられまた、縄文土器、土師器、須恵器などが表採されている（氷見市 2002）。小境海岸（E137° 1' 36" /N36° 55' 7"）は海水浴場で、砂浜がアーチ状にテトラポットで囲まれていたが、多数の漂着物を確認できた。近現代の染付、陶器、青磁などを採集した。松田江浜（E137° 0' 16" /N36° 50' 16"）は砂浜で漂着物は多数見られたが、漂着遺物は発見できなかった。護岸・消波ブロックなどはない。島尾浜（E137° 0' 53" /N36° 49' 50"）は砂浜で、漂着物が多く、漂着遺物も採集することができた。近世の肥前系染付を含む近世～近現代の陶磁器などを採集。護岸・消波ブロックなし。4 は 18 世紀後半の波佐見丸文丸碗。見込みには蛇の目釉剥ぎが見られる。5 は 18 世紀の波佐見染付皿。見込みに五弁花が見られる。6 は近代以降の手描き染付である。7・9 は明治の型紙染付。8・10・12・14・15 は近世の手描き染付。18～19 世紀か。8 は蛇の目凹型高台を有する。11 は肥前系銅緑釉皿。

高岡市

松太枝浜（E137° 1' 39" N36° 49' 19"）は砂浜で、一部護岸・消波ブロックあり、漂着物はみられたが、漂着遺物はなかった。雨晴浜（E137° 2' 31" N36° 48' 54"）はコンクリートで護岸されている海岸だが、砂、礫、貝殻などが打ち寄せられ、一部浜を形成している。貝殻が多く打ち寄せられ、堆積している箇所があったが、そこで集中して漂着遺物を採集した。近世～近現代の染付、須恵器などを採集。消波ブロックなし。16 は明治の型紙染付。17・23 は銅版染付皿。18 世紀～19 世紀の 18・24 は手描き染付。20・21 は近代以降の手描き染付皿。22 は銅版染付皿である。

射水市

海老江浜（E137° 8' 52" /S36° 46' 1"）は砂浜で、海からの漂着物は多いが、漂着遺物は発見できなかつ

た。浜一面に消波ブロックがある。足洗浜（E137° 9' 57" /N36° 45' 40"）は砂浜で海からの漂着物がみられ、近代の染付 1 点を採取した。一部消波ブロック、護岸あり。

富山市

岩瀬浜（E137° 14' 18" /N36° 45' 51"）は砂浜で、漂着物は多少あったが、漂着遺物はなかった。消波ブロック一部にあり。

富山市の四方漁港沖では 2 つの石材が引き揚げられている（Fig.22-2）。四方漁港沖 300m から引揚げた石材であり、石垣構築に用いる割石であることが判明した。この石材の産出地である高岡・氷見海岸部は、江戸前期加賀藩石切丁場となっており、1605 年築城の富山城、1609 年築城の高岡城、1645 年築造の前田利長墓所等に、石垣等石材として調達されている。また、江戸時代の古文書等によると、複数回の津波による海岸浸食により、17 世紀中頃には現在より 700～750m 以上沖に海岸線があったとされ、四方沖 300～350m で確認された石材は、江戸前期には陸地であったと推定される（古川 2010）。

滑川市

早月川河口付近（E137° 22' 52" /N36° 48" 0"）は、砂と小石の礫海岸で漂着物もほとんどみられず、漂着遺物はなかった。

黒部市

石田浜（E137° 24' 57" /N36° 52' 0"）は礫海岸で、近現代の陶磁器片、タコ壺などを採取。消波ブロックなし。黒部漁港付近（E137° 24' 48" /N36° 53' 35"）は礫海岸で、漂着物はみられたが、漂着遺物は発見できなかった。消波ブロックなし。黒部川河口付近（E137° 25' 22" /N36° 55' 8"）は礫海岸。漂着物もみられず、漂着遺物も発見できなかった。消波ブロックなし。

石川県輪島市舳倉島沖（公海上）では有田焼染付 4 点が引揚げられている。現在、黒部市教育委員会が所蔵する（Fig.22-1）。

朝日町

海浜公園（E137° 34' 12" /N36° 57' 47"）は礫海岸で、漂着物は多少みられるが、漂着遺物は発見できなかった。消波ブロックあり。ヒスイ海岸（E137° 35' 30" /N36° 58' 30"）は小石と砂利の海岸で、漂着物自体が少なく、漂着遺物も発見できなかった。一部に消波ブロックあり。

石川県・富山県の水中文化遺産関係資料

石川県の海揚がり品は、縄文土器1点、弥生土器1点、土師器4点、須恵器7点、珠洲焼18点、タイ陶器1点、不明2点。年代は縄文1、弥生1、古墳5、奈良2、平安14、鎌倉5、室町5。引揚げ地点は、輪島市沖7、珠洲市沖13、能登町沖2、穴水町沖1、七尾市沖8、不明2点である(Table.1)。珠洲市や輪島市など底引き網漁が盛んである地域では引揚げ遺物は多いが、七尾市から富山県氷見市にかけては定置網が盛んであり、引揚げ遺物が少ないのでそのためであろう。比較的引揚げ遺物の多い七尾市では遺物はほとんどがなまこ漁によって発見されている。前述のとおり石川県内の漁師などが所有する未報告の引揚げ遺物がまだ存在するようである。今後はそれらの調査を課題としたい。

富山県の海揚がり品は、黒部市教育委員会が所蔵する有田の染付皿が引揚げられた地点は公海上であるからこれを除くと、富山県沿海の海底で引揚げられた遺物は虻が島沖で引揚げられた磨製石器と四方沖から引揚げられた石材のみで、他には確認されていない。前述のとおり定置網漁が盛んな地域であるため引揚げ遺物が発見されにくいのだろう。

参考文献

- 石川県教育委員会,1992『石川県遺跡地図』
石川県輪島市教育委員会,1985『舳倉島・七ツ島(大島)遺跡詳細分布調査報告書』
上杉喜寿,1993『能登・加賀・越前・若狭 北前船の人々』
安田書店
垣内光次郎,1995「能登・大沢海岸出土のタイ壺」『太宰府陶磁器研究』pp.97-101
唐川明史,1993「鹿島郡中島町種ヶ島採集須恵器」『石川考古』218:2,石川考古学研究会
珠洲市史編さん専門委員会編,1976『珠洲市史・第一巻 資料編 自然・考古・古代』珠洲市役所
珠洲市史編さん専門委員会編,1978『珠洲市史・第三巻 資料編 近世古文書』珠洲市役所
図説穴水町の歴史編纂委員会編,2004『図説穴水町の歴史:町制施行五十周年記念』穴水町役場
図説輪島の歴史編纂専門委員会,2003,『図説輪島の歴史』輪島市役所
田川捷一編,1991『福浦の歴史:客との湊』福浦の歴史編纂委員会

- 富来町史編纂専門委員会,1974『富来町史』富来町能登島町史専門委員会編,1982『能登島町史資料編第一巻』能登島町役場
能都町史編集専門委員会,1982,『能都町史第三巻歴史編』能都町役場
氷見市史編さん委員会,2002『氷見市史』7資料編五考古、氷見市
古川知明 2010「富山市四方沖海底の江戸期石材について」『金大考古』67号,pp.15-16
野上建紀 2010『海揚がりの肥前陶磁—海に残された有田焼—』有田町歴史民俗資料館
吉岡康暢,2010「日本海の沈没船は語る」『史跡「珠洲陶器窯跡」国指定記念シンポジウム報告書 珠洲焼誕生!』珠洲市教育委員会
吉岡康暢,1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

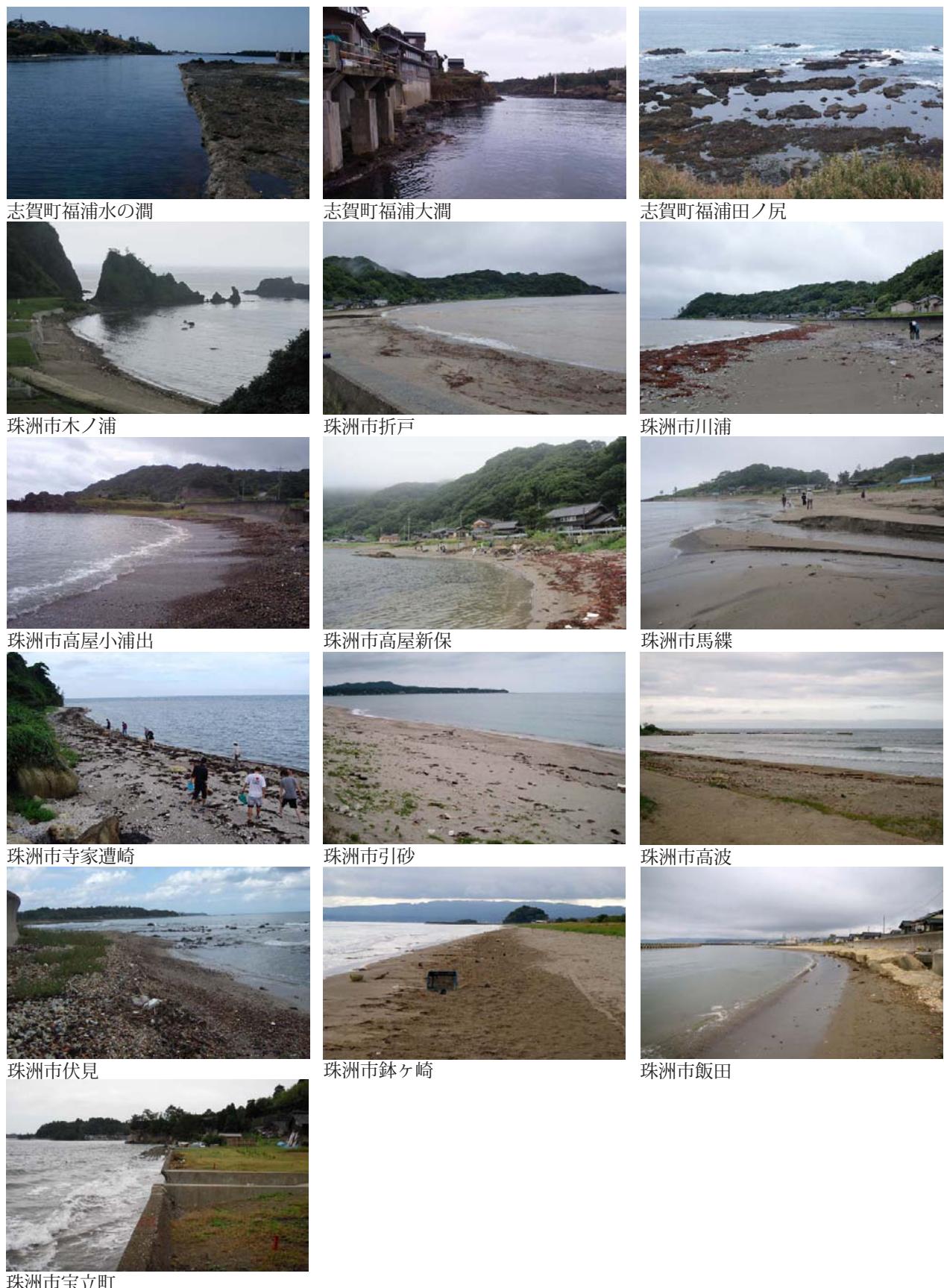


Fig.2 石川県海岸踏査地

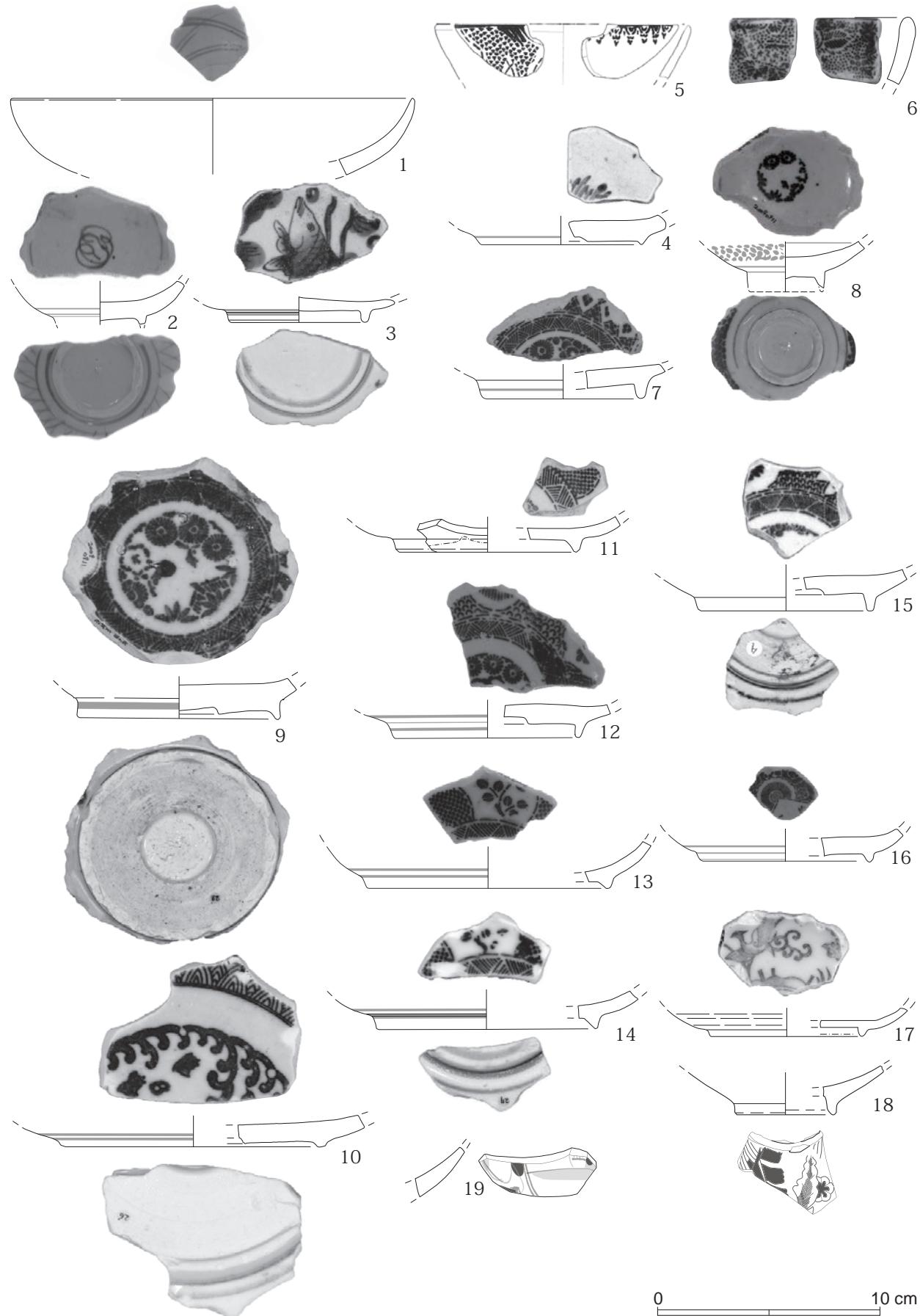


Fig.3 志賀町福浦田の尻. 表面採集資料

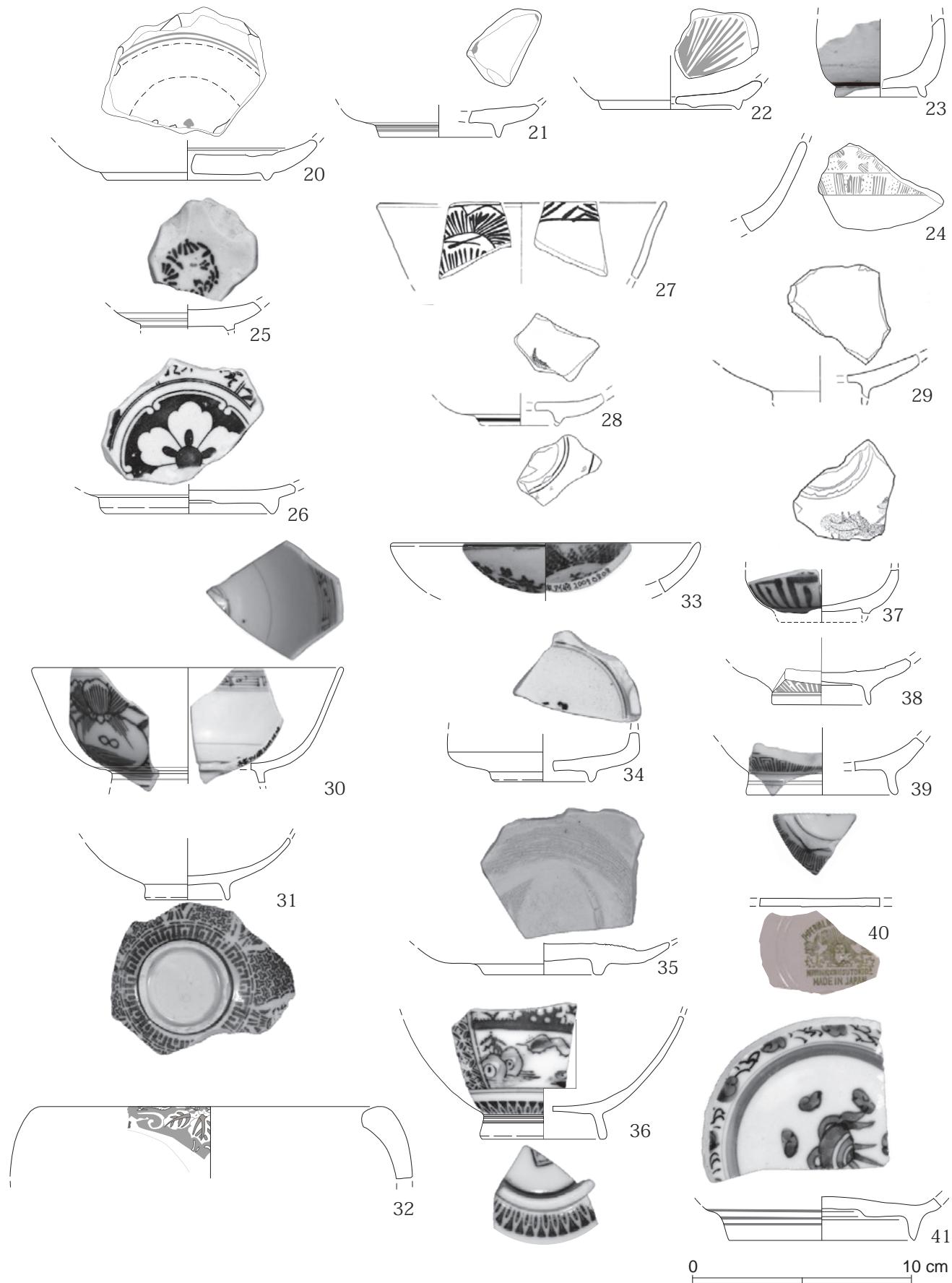


Fig.4 珠洲市域 . 表面採集資料 (20-24= 小浦出 ,25-29= 木ノ浦 ,30-41= 寺家遭崎)

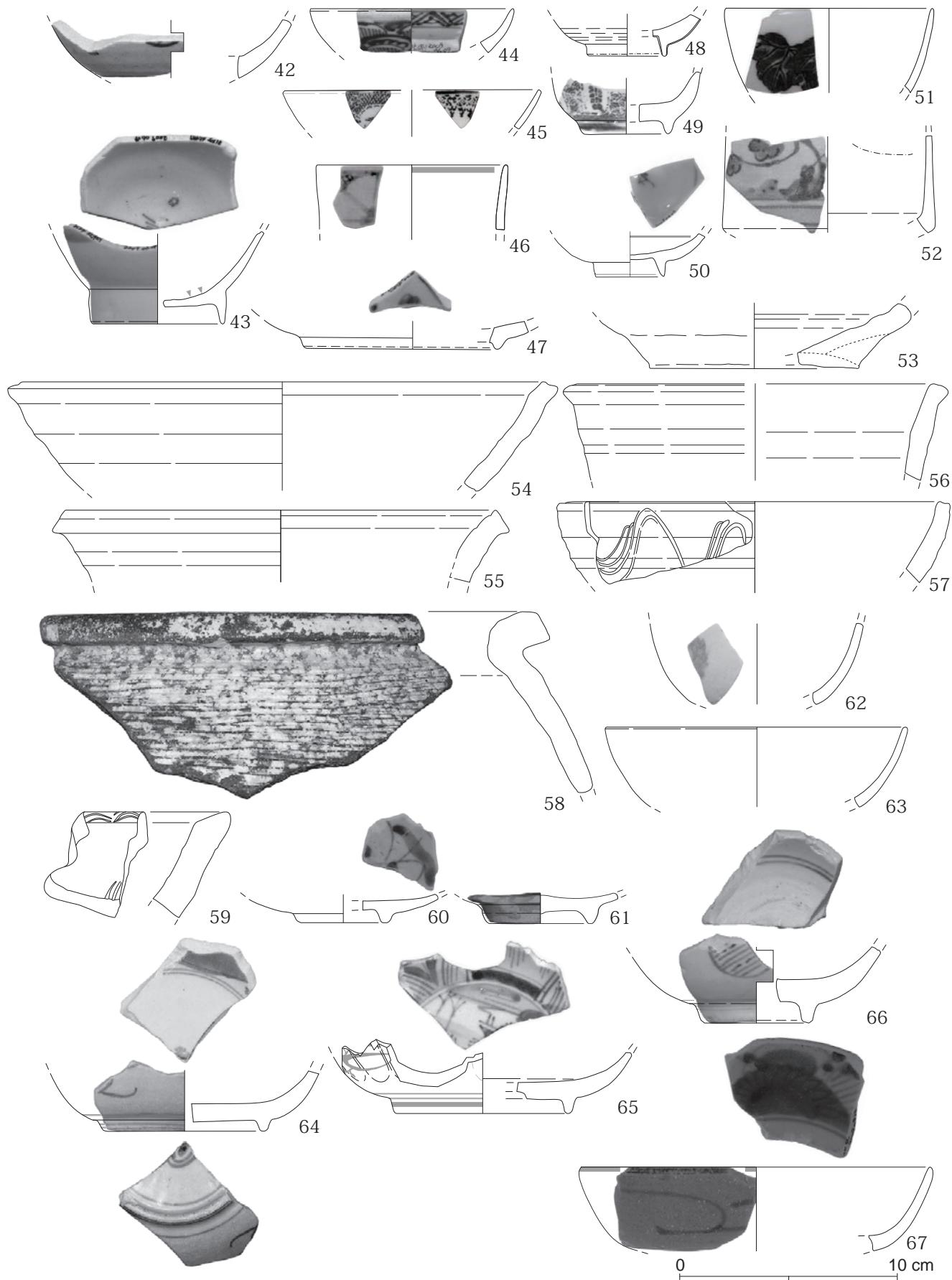


Fig.5 珠洲市域表面採集品・表面採集資料 (42-57=引砂, 58-67=伏見)

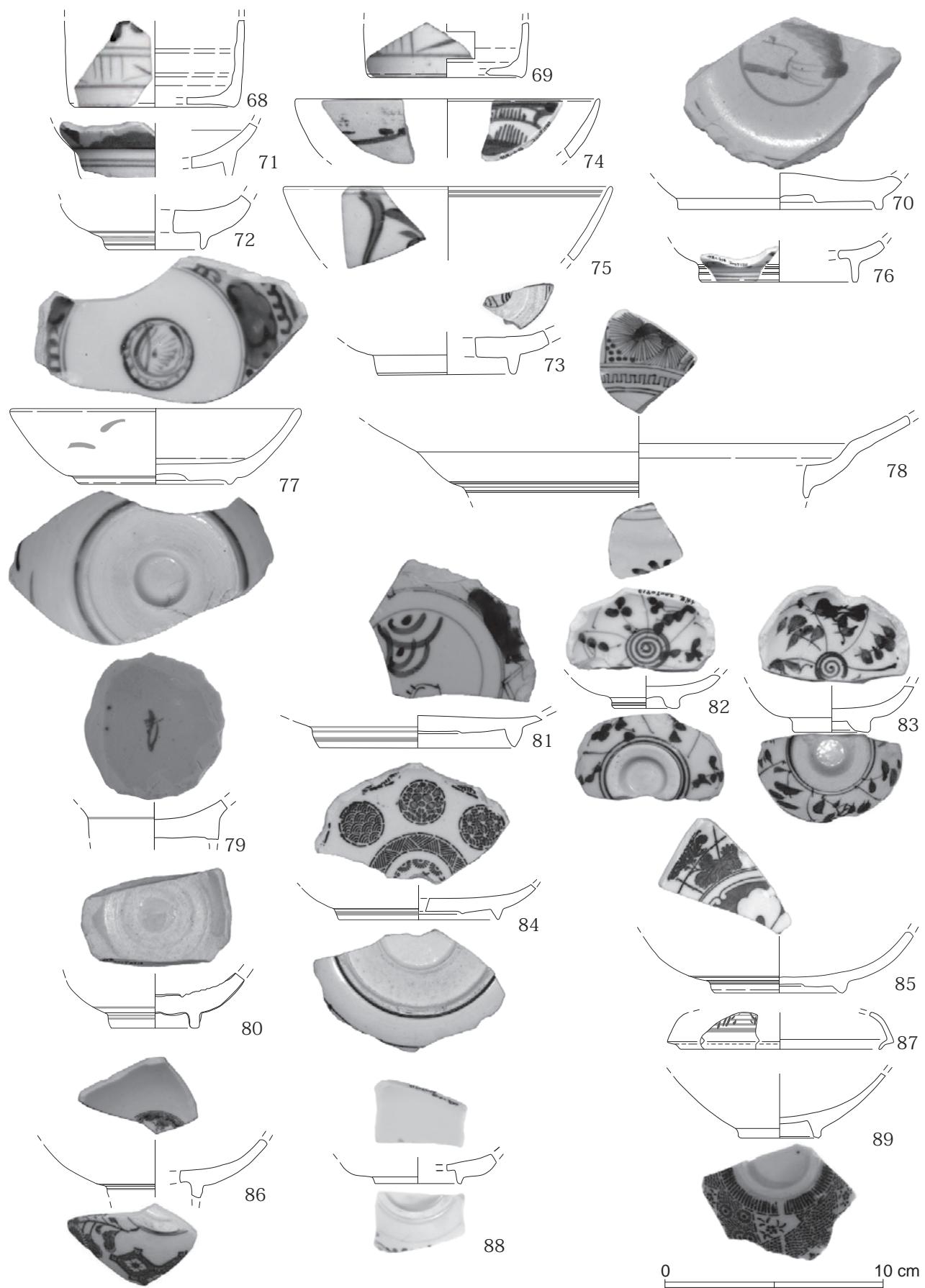


Fig.6 珠洲市伏見、表面採集資料

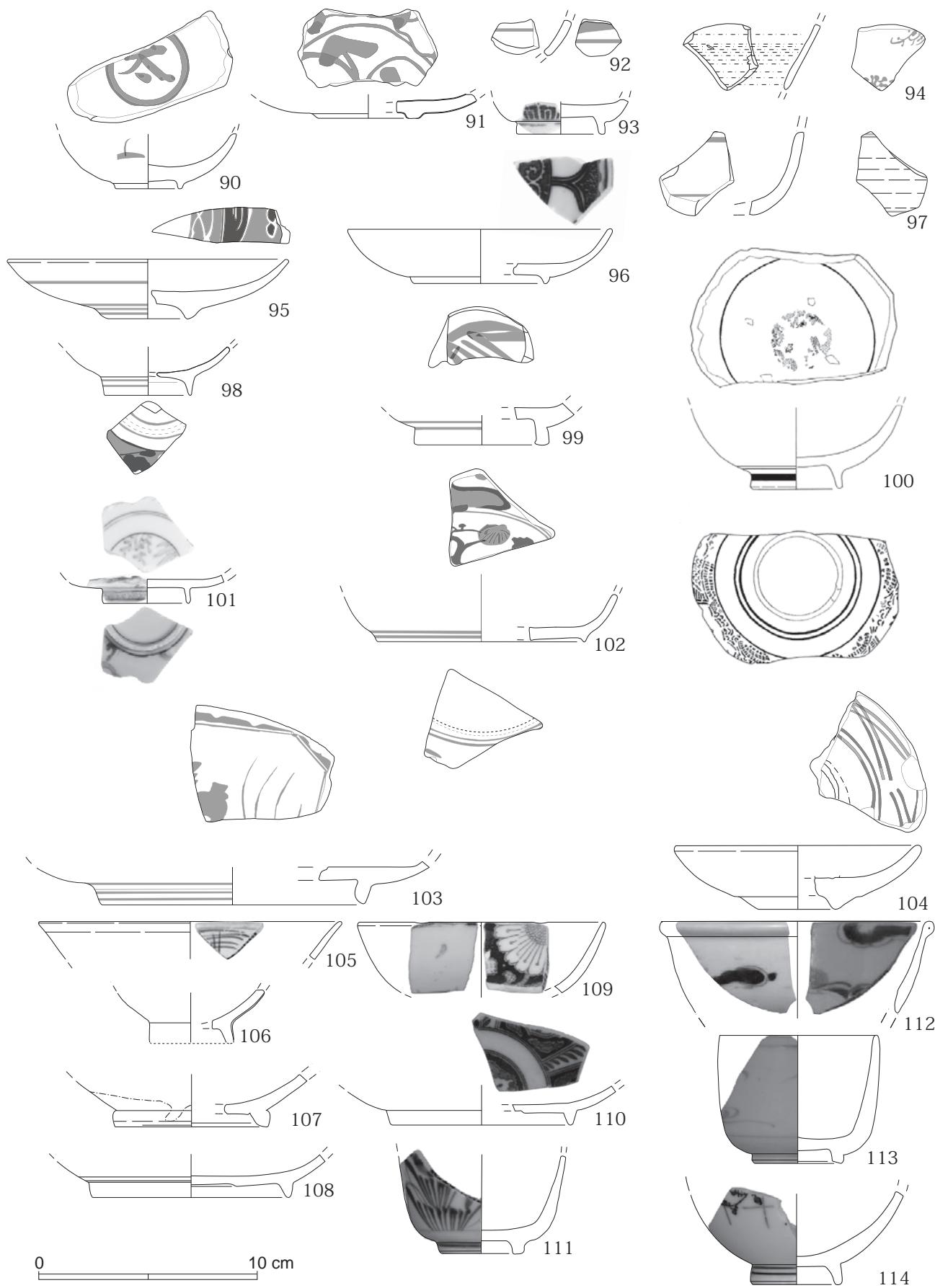


Fig.7 珠洲市域 . 表面採集資料 (90-104= 伏見 ,105-114= 飯田町)

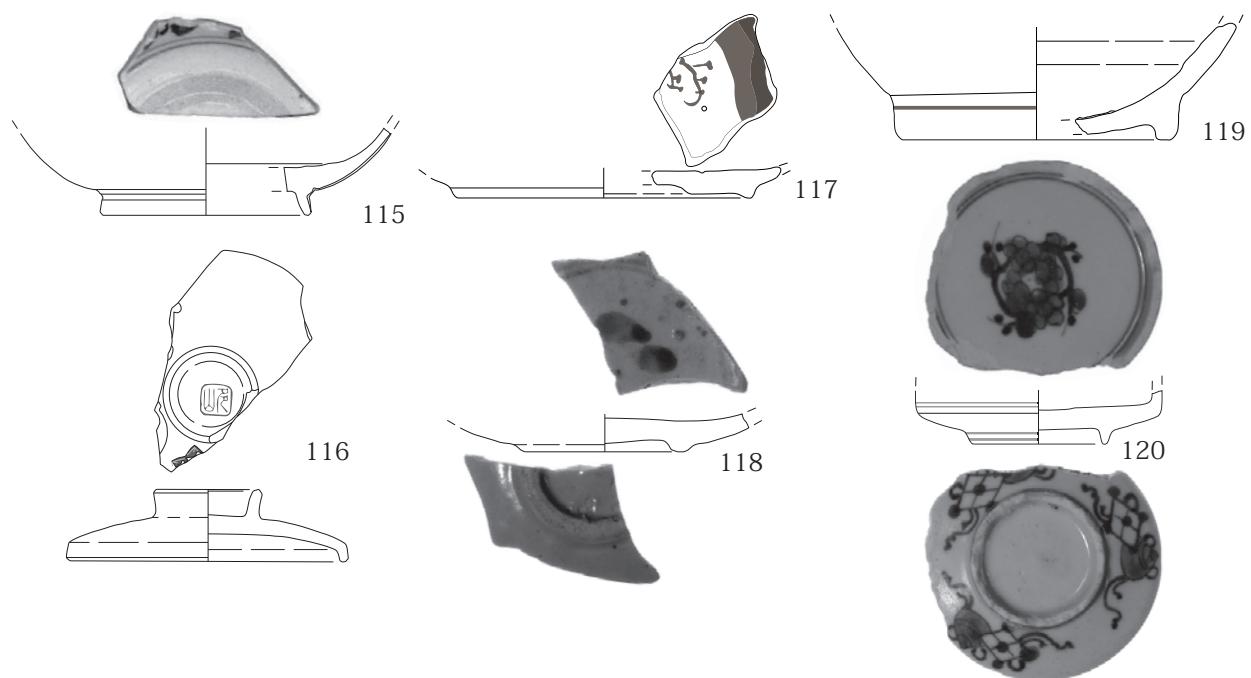


Fig.8 珠洲市域. 表面採集資料 (115=高波, 116=笹波, 117-120=高屋新保)

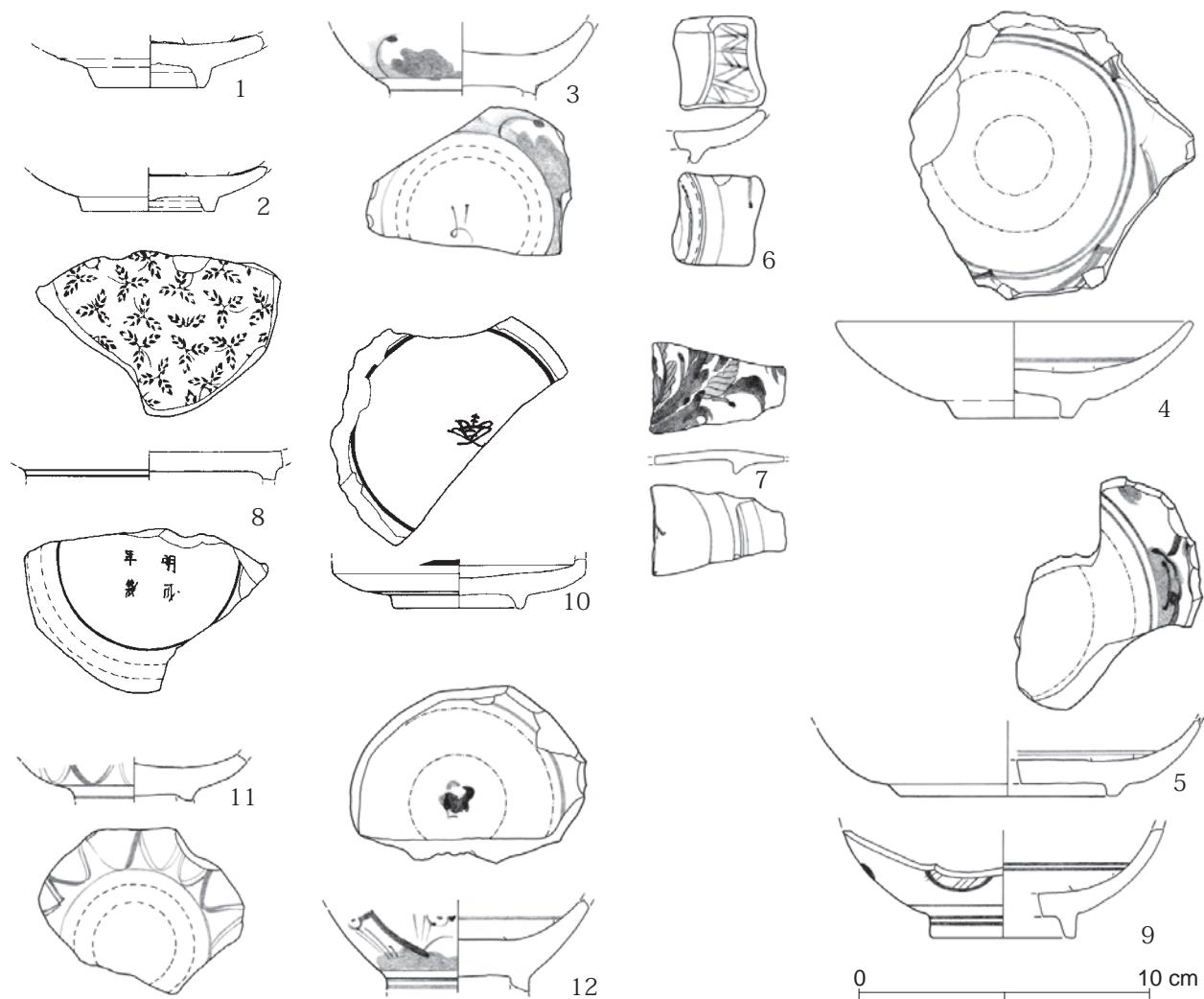


Fig.9 桢谷氏表採資料 (1)

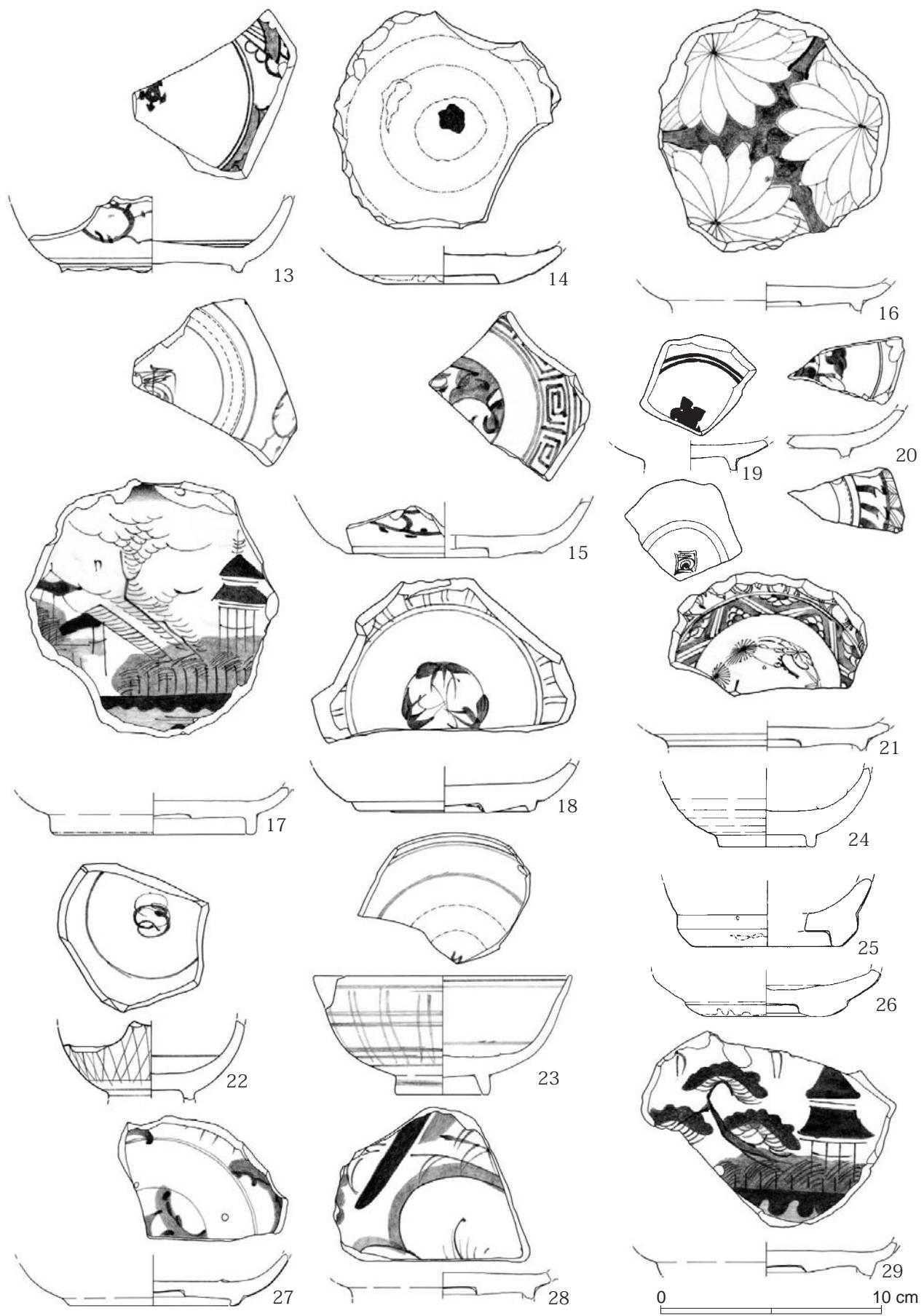


Fig.10 桜谷氏表採資料 (2)

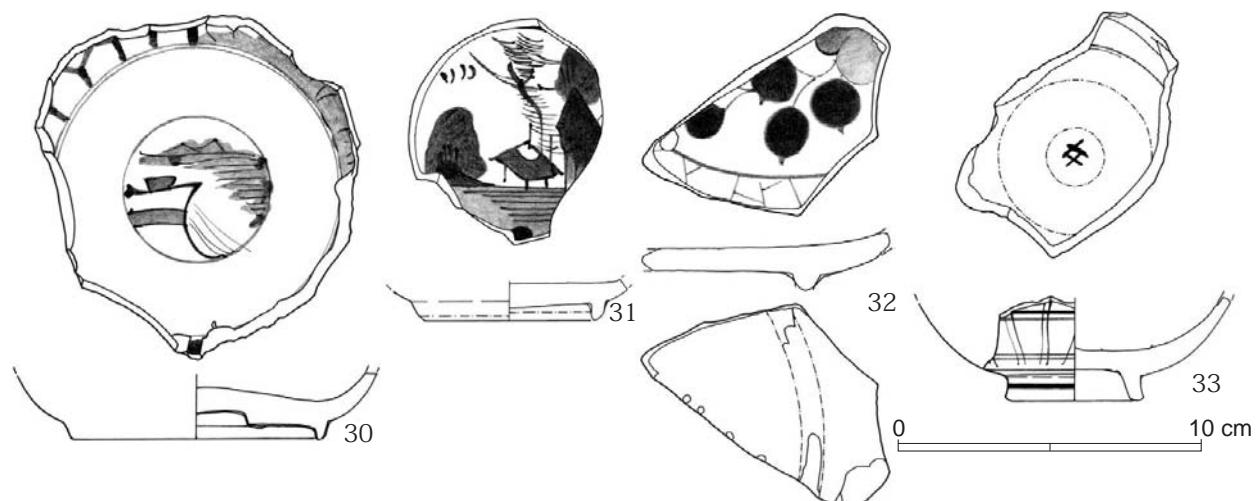


Fig.11 桢谷氏表採資料 (3)

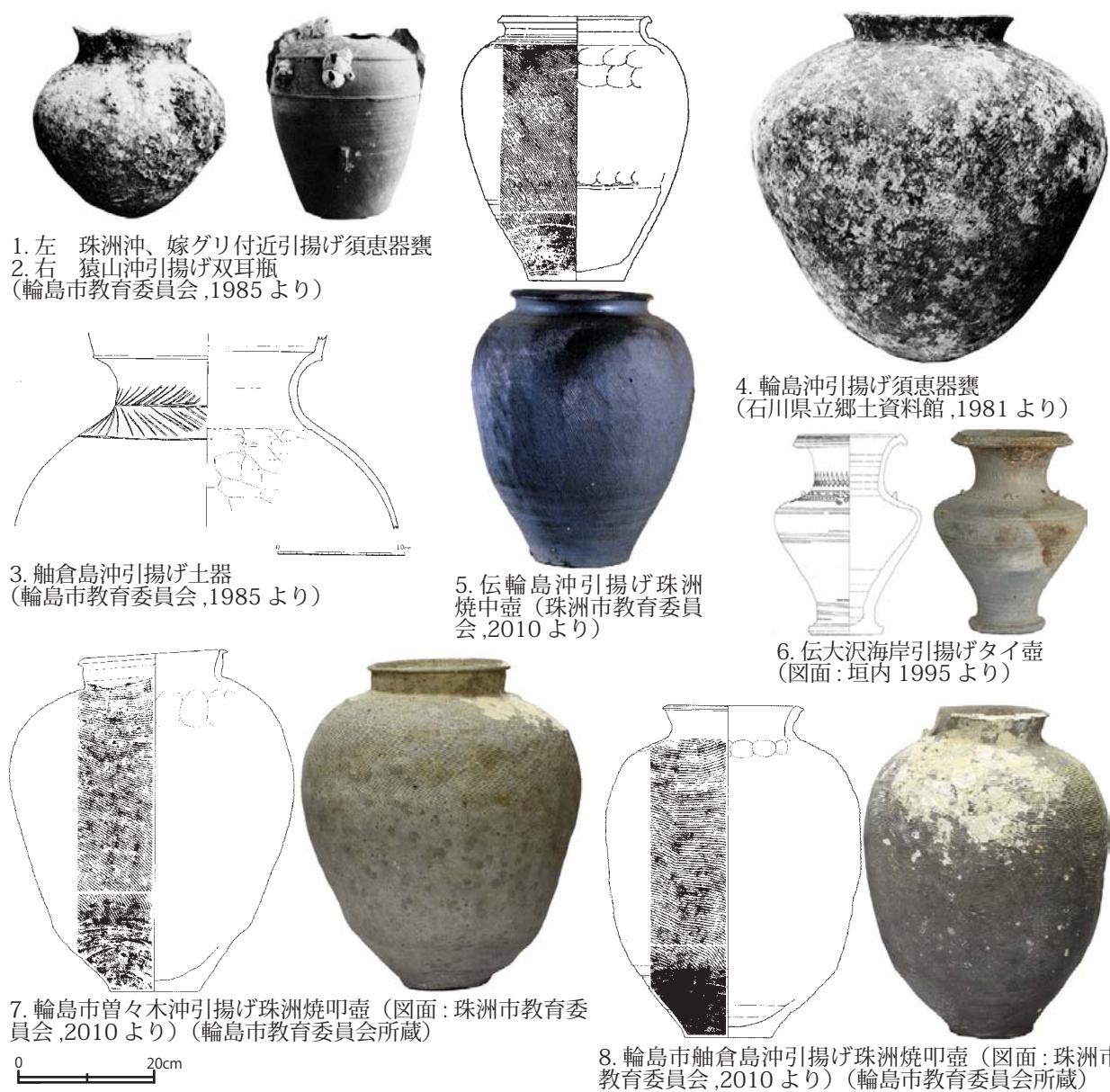


Fig.12 石川県内海揚がり品



Fig.13 石川県内海揚がり品





34a. 龍泉窯青磁碗（15世紀）. 内面



34b. 龍泉窯青磁碗（15世紀）. 外面



35. 肥前陶器溝縁皿（17世紀初頭）



36. 丸文丸碗（18世紀後半）



37a. 二重斜格子文皿. 内面



37b. 二重斜格子文皿. 外面（18世紀前葉-中葉）



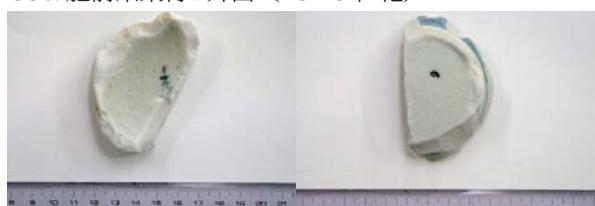
38a. 肥前系染付. 内面



38b. 肥前系染付. 外面（18-19世紀）



39. 二重網目文丸碗（18世紀）



40 広東碗（1780-1830年）

Fig.15 枡谷氏表採資料(4)



41a. 波佐見 . 染付皿 . 内面



41b. 波佐見染付皿 . 外面 (18世紀前葉 - 中葉)



42a. 波佐見徳利 / 仏花瓶 / 袋物 . 内面



42b. 波佐見徳利 / 仏花瓶 / 袋物 . 外面 (19世紀)



43a. 肥前染付皿 . 内面



43b. 肥前染付皿 . 外面 (19世紀)



44a. 肥前系染付 . 内面



44b. 肥前系染付 . 外面 (18世紀後半 - 19世紀前半)

Fig.16 枡谷氏表採資料 (5)



45a. 産地不明（肥前系？）. 内面



46a. 有田染付皿. 内面 (18世紀前葉 - 中葉)



47a. 肥前系 銅緑釉 / 青磁皿 内面



48. 型紙刷染付皿 (明治~)



50. 型紙刷染付 (明治~)



45b. 産地不明（肥前系？）. 外面 (18-19世紀)



46b. 有田染付皿. 外面 (18世紀前葉 - 中葉)



47b. 肥前系 銅緑釉 / 青磁皿 外面



49. 型紙刷染付皿



51. 銅版染付大皿ほか (銅版と型紙の組み合わせ)

Fig.17 枝谷氏表採資料 (6)



52. 手描染付皿（近代以降）



53. 手描染付皿



54. ゴム版染付碗（大正～）

Fig.18 桁谷氏表採資料 (7)



55. 珠洲焼



川浦海岸採集品



川浦海岸採集品



川浦海岸採集品 . 内面



川浦海岸採集品 . 外面



馬縷採集品 . 内面



馬縷採集品 . 外面

Fig.19 珠洲市域表採資料



Fig.20 珠洲市域表採資料



Fig.21 富山県. 海岸踏査地



1. 石川県輪島市舳倉島沖（公海）で引揚げられた 17 世紀末～18 世紀初の有田の染付皿（黒部市教育委員会所蔵）（野上 2010 より）



2. 四方漁港沖から引揚げられた石材

Fig.22 富山県. 水中文化財関係品

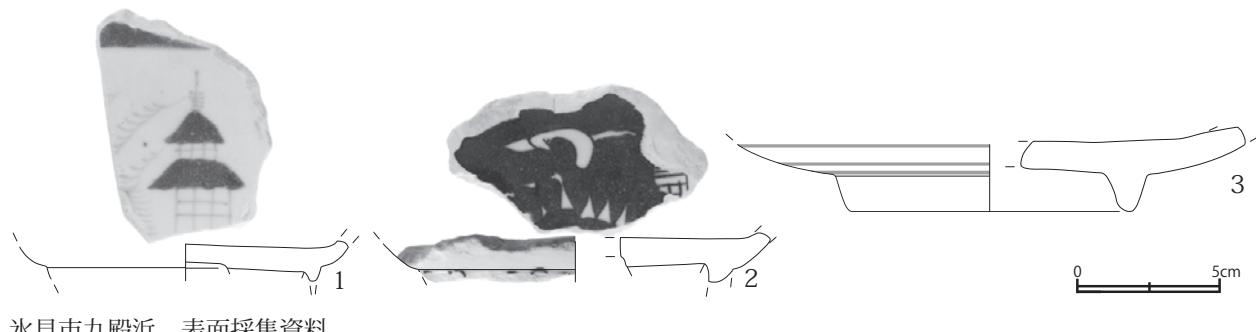
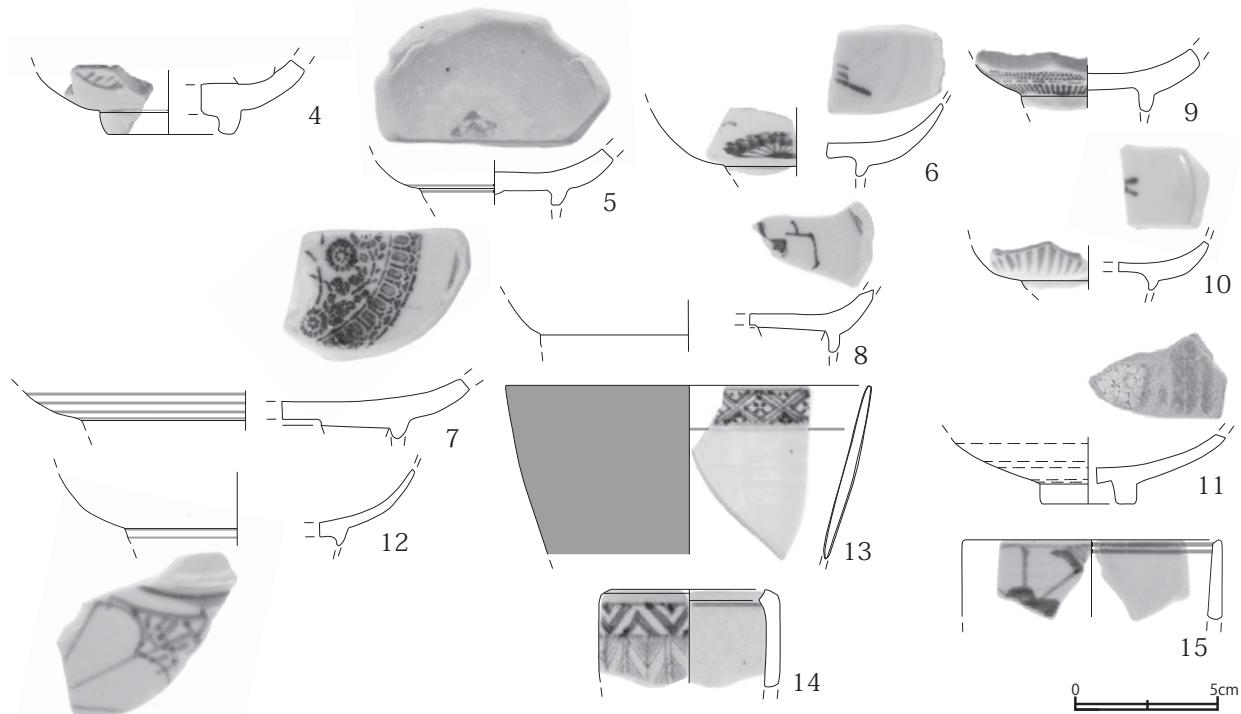
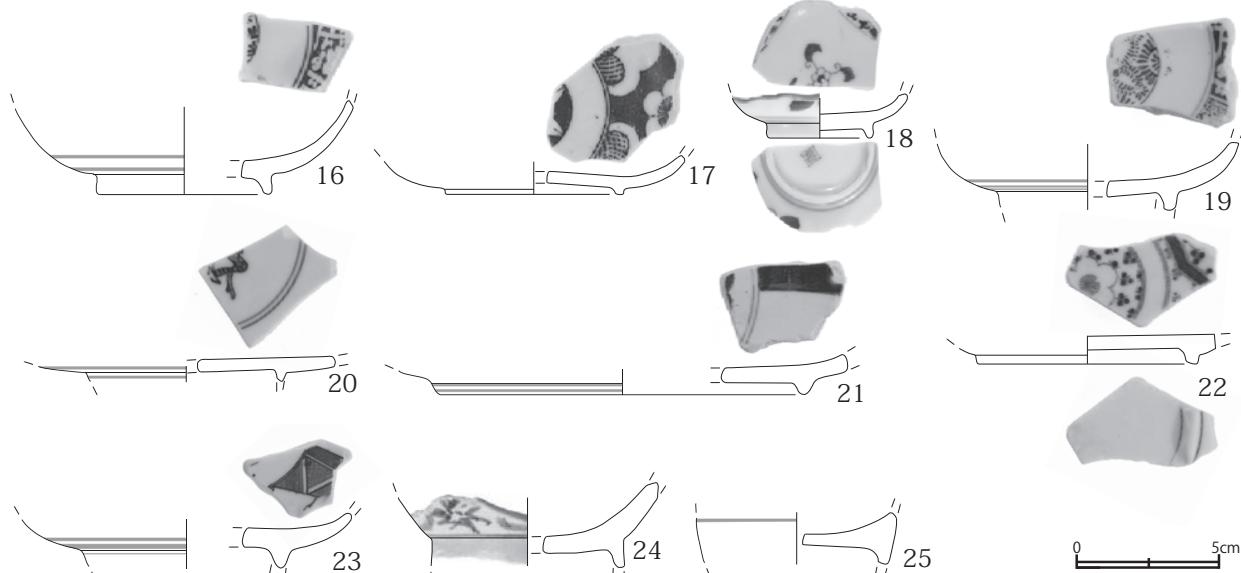


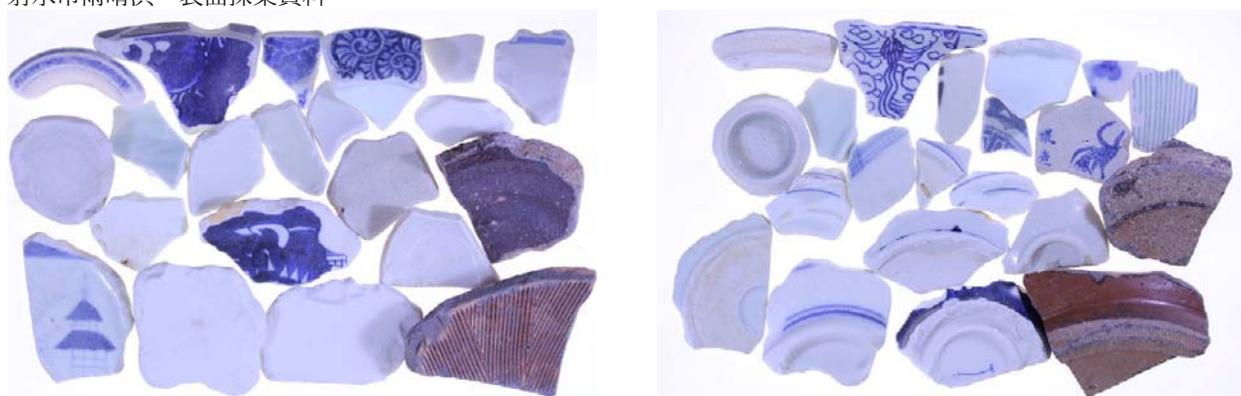
Fig.23 富山県. 表面採集資料



水見市島尾浜 表面採集資料



射水市雨晴浜 表面採集資料



水見市九殿浜. 内面

水見市九殿浜. 外面

Fig.24 富山県. 表面採集資料

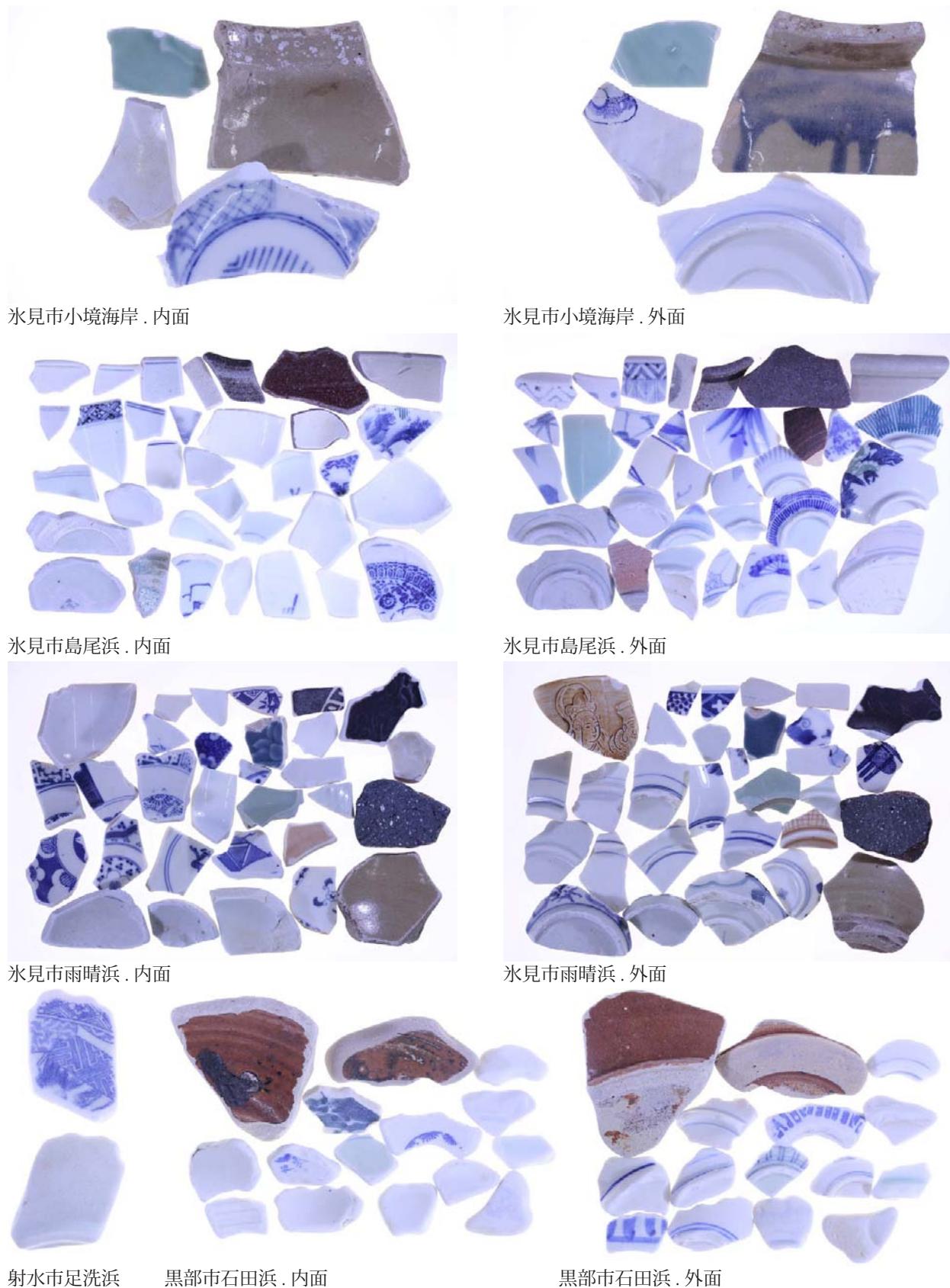


Fig.25 富山県・表面採集資料